

第三百七十八回 青葉会

平成二十九年九月二十八日(木)

午後六時〜八時半 文京区民センター

〈顧問〉 ☆ 川合万里子 先生

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか
中野一灯 山崎亜也 山内天牛

〈投句〉

伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 星田啓子 宮内規雄
山田けい子 渡邊盛雄

〈紙上選句〉

安部眞希子 楠田彦十 後藤保明 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明
村田くに子 山本三恵

《互選句》

六点

☆ 旅宿の五右衛門風呂や虫すだく 孤舟 (紀・万・ゆ・允・く・天)

五点

☆ 山宿の秋を炊き込む自在鉤 孤舟 (猛・万・ゆ・灯・天)

◎ 雷鳥の母呼ぶ声や遭難碑 一灯 (眞・忠・孤・彦・天)

☆ 町会から栄太楼の菓子敬老日 天牛 (紀・万・弘・正・亜)

四点

◎ 生傷は力士の矜持秋蘭ける 盛雄 (紀・孤・ゆ・く・天)

☆ 生き方問ふ遺影の眼(まなこ)盆の葬 紀久男 (万・忠・敏・三)

☆ 釣船の客我独り天高し 忠彦 (紀・万・弘・天)

☆ 松茸やまたも黙する父と婿 五郎太 (眞・彦・弘・亜)

☆ 白露や形見となりし初句集 堂哉 (紀・万・ゆ・く)

☆ 秋の夜や生きた証と句集編む 全 (万・千・ゆ・允)

◎ 滾つ瀬や月のかけらを躍らせて 一灯 (万・孤・保・弘)

◎ 霧籠めの月山講や鈴の音 全 (孤・五・弘・允)

☆ 野分雲海鳴りはげし原子炉塔 ゆたか (紀・敏・正・亜)

☆ 風鈴のものはやかしまし仕舞ふ時 啓子 (猛・万・千・龍)

三点

☆ 一心に栗剥く妻の白い指 そらお (万・彦・天)

☆ 徒競争(かけくら)順位を言はず栗弁当 紀久男 (万・眞・猛)

☆ 秋の夜や快気褒美の酒一合 忠彦 (紀・万・龍)

☆ 年毎に緩む涙腺小鳥来る 孤舟 (千・允・く)

☆ 爽やかや俠氣の見得の吉右衛門 弘子 (万・敏・允)

☆ きちきちのひと跳び解散また選挙 全 (眞・五・正)

☆ 窓少し閉めて虫の音絞りたり 全 (保・千・灯)

◎ 石を投ぐさんま不漁のオホーツク 健介 (眞・孤・龍)

☆ 爽やかや詭経の尼僧美声なる 恵洲 (万・く・亜)

◎ 空二分して夏の雲秋の雲 恵洲 (忠・弘・灯)

◎ 工作のハンダの匂ひ夜長し 亜也 (孤・彦・正)

◎ 秋場所や魚屋の猫と北の富士 天牛 (忠・龍・三)

☆ 工場所や魚屋の猫と北の富士 (とつてはいけない禁手)

☆ シンプオニーの指揮者は見えぬ虫しぐれ 盛雄 (忠・敏・三)

☆ 吉右衛門の芸継ぐは誰(きそ)獺禁忌 紀久男 (彦・敏)

☆ 秋晴れや葉減らせて身も軽く 忠彦 (紀・万)

☆ 岬鼻の野生の馬や天高し 孤舟 (眞・灯)

☆ 伯林の幽霊に会ひさうな秋 五郎太 (紀・正)

(☆…下五「そうな」↓「さうな」)

- ☆ 新米にチヨコレート添へ転送す
弘子 (万・灯)
- 白い秋曳き曳き蟻の遠ざかる
弘子 (五・三)
- ◎ あの星が終の住処か夕すすき
ゆたか (孤・灯)
- 秋蝶や八十路のわれに戯れり
全 (千・三)
- 裸灯のをとこのアジト新走
一灯 (彦・ゆ)
- 鳴くほどに命透きゆく秋の蟬
昇 (五・保)
- ☆ 二日酔い押さえに初の柿を食ふ
啓子 (猛・万)
- (☆↓「二日酔ひ押さへに初の柿を食ふ」)
- ◎ はや北の便りに赤き草もみぢ
全 (孤・天)
- 友の織る秋のストール甕覗(かめのぞき)
全 (紀・亜)
- ☆◎ 有るがままに風を友とし秋桜
規雄 (万・孤)
- (☆↓「在るがまま風を友とし秋桜」)
- 電柱に蟬激突し命果つ
全 (千・く)
- ☆ 深更に明日待つ木槿ほの白く
亜也 (万・保)
- (☆↓「深更の明日待つ木槿ほの白し」)
- ◎ 武相荘夫妻の美学柿実る
亜也 (忠・孤)
- 焼かれても秋刀魚きりりと見つめたり
けい子 (猛・保)
- 灯を消して雨の音聴く夜半の秋
そらお (允)
- 初代十寸見(ますみ) 河東の法要
紀久男 (敏)
- 垢抜けた三味線形の石燈籠
猛 (龍)
- もう一献戻り鯉が催促す
全 (三)
- 秋彼岸御萩狙ひし頃もあり
五郎太 (龍)
- 秋の虹隣の客の肩たたき
健介 (万)
- ☆ 秋霖や意外に遠い歯科医まで
(☆…語順を変えてみたい「歯科医まで意外に遠し秋時雨」)
- ドロップの葡萄色選り秋惜しむ
一灯 (亜)
- ◎ 太刀魚の鑑定のごと糶(せり) 出さる
昇 (孤)
- 枝ひとつ無駄なく小花の杜鵑草(ほととぎす)
啓子 (紀)
- 梨もぎに行きし稻城の今むかし
亜也 (正)
- 秋麗ら主人自ら垣を刈る
全 (五)
- 夕闇に芒ささやく山の裾
けい子 (紀)
- ☆ 秋の夜や讃岐うどんを皆で打つ
天牛 (万)
- (☆…下五「打つ」↓「打ち」)
- 太鼓たたく音の虚しさ秋の雨
全 (五)
- 凡庸に生きて優遊大根蒔く
盛雄 (紀)

● 次回青葉会

十月二十六日(木) 午後五時半〜八時半 文京区民センター

▲ 当季雑詠五句 投句二句

十一月三十日(木) 年忘れ句会

鈴木演芸場昼の部見物↓築地「紅蘭」会費 口長

以上 文責 紀久男

平成二十九年九月句会報

一 今回は病氣回復の忠彦さんから10名出席。投句9名。孤舟選者及び松浦加古さんの作品掲載誌の句の「コピー」及び「俳句あるふあ」(毎日新聞)4・5月号(夏井いつき特集)、恭延さん寄稿の「私の好きな季語」萬緑(2006年4月号掲載の「コピー」)。大滝君の落語会チラシを回覧し乍ら開会。猛さんの進行役で御覧のように孤舟さん、天牛さん、一灯さん、盛雄さんが好成績でした。忠彦さんが準備された軽食(鳥の唐揚、鉄火巻、漬物等)、万里子先生寄贈の「井之頭煎餅」とミニ羊羹、亜也さんの純米大吟醸「大信州」、忠彦さんの純吟「真澄」、小生の純米「半蔵・神の穂」(伊賀)を賞味しつつ社友会ビアパーティ(社長挨拶。保明さん出席されたこと等)や亜也さんが句に詠まれた武相荘の主に天牛さんが呼び出しを食った思い出などを話題にしました。

二 関係者近詠

春雷や耳塞ぎつつ吟行へ	万里子	黎明の朝顔市の湿りかな	孤舟
島うらら船跡消ゆる無音界	全	初風に戦ぐ竹林嬾やかに	全
閑(しづ)けさや詩友と滝を聴く真昼	全	明日の色蕾に包み牽牛花	全
一株に十花の蛍袋かな	全	鳳仙花爆ぜて天地を轟かす	全
亡き父の文語聖書を繰る日永	全	噴煙を染めつつ島の秋夕焼	全
白米を巻く新海苔の黒光り	全	寝静まる合掌の郷銀河濃し	全
満月と明星の間(あひ)へ遠火花	全	散り急ぐ木犀の香や夜のしじま	全
くちなしや清拭タオルへ熱湯を	眞希子	少年に秘密ありけり黒葡萄	全
蜈蚣打つ介護が鍛へし腕っ節	全	柳散る水の都の船着き場	全
金魚草小金を得れば奢り癖	全	火のごとき柘榴の裂け目無口なり	全
泣くまいと迷子の我慢立葵	弘子	銀漢の流るる果ての漁火よ	全
母の忌や檸檬の花の硬く咲く	全	基督の磔刑像やうそ寒し	全
黒髪の利発な腫パリ祭	全	――「俳句」10月号	
妻へ一輪赤に力のある薔薇を	青史	垂直に水落とすダム秋初め	孤舟
手火花その火玉のごとく畢りたし	全	漁網繕ふ秋光を編み込みつ	全
万緑の力の中にあて淋し	全	落陽の忘れ形見の烏瓜	全
語り部のふいの嗚咽や卯波騒(南三陸町)全	紀久男	――「俳句四季」10月号	
蒸し暑きミナミ占領華語韓語	全	妻はにかみつ踊の中に入りけり	規雄
――「森の座」10月号		――「NHK俳句」10月号	
秋風が弾痕抜けるジヤズの街	正明	山霧が隠す馬籠の石地藏	盛雄
ペン胼胝は死語となりけり灯火親し	全	競ひ合ふ秋の七草たからづか	全
夕さりの何急かさるる法師蟬	允章	移る世や千年変らぬ虫の声	健介
白桔梗三味ひく母の正座かな	全	全摘を見舞ひし帰途や鉦叩	全
磯菊や安房の磯波音もなく	全	虚栗子につけ回す長寿かな	全
雨上がる庭のソリスト鉦叩	堂哉	地虫鳴く妻とアンパン半分こ	紀久男
虫の音を聞き分けしつゝ寝入りけり	全	バツイチの子持を貰ふ秋挙式	全
秋うらら銀盃享くる母百歳	全	――きさらぎ句会 9月	

三 司馬遼太郎の俳句：「俳句」10月号に司馬遼太郎記念館の上村館長が披露。

風花に京(みやこ)さびたる格子かな
立春や嘉兵衛の里の古いらか

平成二十九年十月二十日

紀久男記